ELZKV—A1

二〇二五年度入学試験問題

国語

（六〇分）

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。

二、この問題冊子は23ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

解答用紙（マークシート）の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。

三、解答用紙（マークシート）は折り曲げたり、汚したりしないでください。

四、解答は、すべて解答用紙（マークシート）に記入し、解答用紙（マークシート）の枠外には、なにも書かないでください。

五、**解答番号は、1～40まであります。**

解答用紙（マークシート）には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。

六、マークは必ずＨＢの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。

七、監督者の指示に従って、解答用紙（マークシート）に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。

八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

サイボーグとは、技術と生体とのハイブリッド(注1)のことだ。では、競技用の義足やダイビング用のタンクを身につけた人はどうだろう。人間と技術の密接なかかわりは、最先端の技術に限った話ではない。ナイフや入れ歯は古くから存在していたし、杖(つえ)、靴、眼鏡だって、身体能力を補い増強する立派な技術である。[a]私たちは昔からすでにサイボーグだったのだろうか。

A 、サイボーグのイメージと、たとえば眼鏡をかけて過ごす日々の生活は、すぐには結びつかない。眼鏡をかけて外を歩いても誰も気に留めないし、うっかりすると、眼鏡をかけていることを忘れたまま、どこに置いたか探してしまうことだってある。その瞬間、眼鏡をかけて目の前に現れている世界は、[b]「世界そのもの」のように感じられている。技術はあたかも身体の一部のようであり、両者のあいだの境界はわかりづらい。あまりに自然に感じられるこうした技術を、わざわざサイボーグと呼ぶ必要はないだろう。ナイフを手にすることでつくりだされる世界、杖を使うことではじめて感じられる世界についても、同じことがいえる。

では、それが色眼鏡だったらどうだろう。そこで見えているのは、技術がつくりだした、人工的で、ゆがめられた世界なのではないか。とたんに、それは「世界そのもの」ではないと言いたくなってくる。遺伝子を改変して害虫を寄せ付けなくなった植物の種は、人工物であって「自然の」種ではない。記憶力を高める薬を飲んで試験を受けても、それは「本当の」能力ではない。ズルだ、偽物だ、そんな声も聞こえてきそうだ。技術の問題には、世界へのかかわり方にまつわるこうした緊張感がたしかに漂っている。

[c]このとき、自然と不自然、本物と偽物のあいだには、ちょうど、眼鏡とサイボーグのあいだにあるのと同じ差異が感じとられていることを確認しておこう。眼鏡をかけた人は[d]イゼンとして人だけれど、サイボーグになってしまったらもう人ではない、というように。機械につながれた人をサイボーグと呼びたくなるのは、その存在が、人と呼ぶにはあまりに不自然に感じられるからだ。逆に、眼鏡をかけた人や靴を履いた人をあえてサイボーグと呼ばないのは、そのことで人の本性に変化が生じているようには感じられないからだろう。

だが、[e]シャクゼンとしない思いも残る。この自然と不自然の感覚は、私たちの本来的な感覚なのだろうか。サイボーグであることがあたりまえの世界で、そのことに慣れてしまえば、眼鏡でみる世界と眼(め)でみる世界のあいだに本質的な差異などないのではないか。不自然に感じられているだけで、じつは自然なことではないだろうか。それならば、なぜ不自然に感じたりするのだろうか。

技術と人の関係を考えるには、この自然と不自然の感覚からはいったん距離をおいてみたほうがよいのかもしれない。代わりに、人はもともと技術的な存在であったという歴史的な事実を確認することからはじめてみよう。人類学における技術論は、私たちをそうし

た理解へ導いてくれる。

人を「道具を作る動物」と呼んだのは、アメリカ合衆国建国の父とも言われる、ベンジャミン・フランクリン(注2)である。フランスの哲学者アンリ・ベルクソン(注3)は、ここからさらに、f人間的な知性の定義の中心に道具の製作を位置づけた[ベルクソン　二〇一〇]。人は、ホモ・ファベル（工作する人）であることによって、他の動物から区別される。人の知性とは、道具を作るための道具を製作し、そしてその行為を無際限に変化させる能力のことである。

この定義で強調されているのは、道具の製作や使用そのものというよりは、それらを作り出す際限のない能力である。サルやチンパンジーもまた、石や棒といった単純な道具を用い、さらにはその使い方を工夫したり伝達したりすることが知られている。人がそうした動物と区別されるのは、人が道具を使用するときに、記号システムや言語といった意味の領域や、意図や表象といった複雑な心的機能とのかかわりがみられるからだ。わかりやすくいえば、人が道具にかかわるとき、そこには「心」が想定されている。この意味で、技術は、言語とはまた異なる仕方で世界を把握し、そして世界をつくりだす、すぐれて人間的な方法なのである。

人類学の分野で技術の問題を正面から扱ったのは、フランスの人類学者マルセル・モース(注4)である。ベルクソンと同時代人でもあったモースは、先に引用したホモ・ファベルの定義にふれながら、技術をまずは身体とのかかわりでとらえている。たとえば、歩き、走り、眠るという何気ない動作には、目的や状況に応じた特定の身体の使い方がある。枕を使って眠る、ハンモックで眠る、馬の上で眠る、立ったまま眠る、といった具合だ。モース自身は、歩きながら眠ったことがあるとさえ記している。道具の使用に先立つこうした身体の使い方は、「身体技法」と呼ばれる。身体技法は、目的の達成にとって有効なものであり、また伝承される[モース　一九七六]。

これに対して、身体の外側に独立した機能として作り出されたモノを、「道具」、その複雑な構成を「技術」と呼ぶことができる。手で紙を半分に切るときに私たちがする動作が身体技法だとすれば、同じ作業をするためにペーパーナイフを製作するのは、技術（道具）の発明である。

g技術の特性について、モースは「相互的因果」という概念を提起している[Mauss　2012]。人は、ある動作や技法の延長線上に技術を作るだけでなく、作り出された技術によってみずからが影響を被るという、反対方向の関係性に同時にまきこまれているということだ。たとえば、先の尖(とが)った石器（尖頭器(せんとうき)）は、大型の動物を仕留めるために用いられた旧石器時代の代表的な道具であるが、同時にそれは、狩猟という社会的行為を可能にし、狩猟社会が成立するための物理的な条件ともなった。石器やそれを用いた狩りの技術がなければ、人は大型動物を仕留めることができなかっただけでなく、一定規模の社会を営むこともできなかっただろう。このhソウホウコウに展開する関係性が、モースにとって、人や社会を理解するための糸口となるのである。

このとき人は、知性の本質や、動物との本性上の差異を定義することによってではなく、[B]、技術との関係にまきこまれた具体的な生のあり方として理解されている。技術は、ただ便利な道具であるとか、身体機能を拡張させる人工物というだけではない。また、人は、技術を作ることができる優れた知性を本来的に備えているから人なのだというわけでもない。技術を手にすることで「ヒト」から「人」になったのであり、[i]人と技術は、何重にも折り重なった相互的因果のレンサ[j]のなかでしかとらえることができない存在なのである。

この相互性は、尖頭器や斧（おの）といった素朴な技術だけでなく、文字や地図といった、より複雑な技術、そして技術の複合体としての機械やシステムについても、同様に考えることができる。人と技術のあいだに一方向の関係性しか想定できなければ、自然や不自然についての私たちの思考ははるかに限られたものになってしまうだろう。

[k]ボウトウでふれたように、色眼鏡でものをみていることに気がつかないくらいに世界が自然に感じられてしまうとき、技術と自然はもはや区別することができなくなる。目覚まし時計の音で目を覚まし、電車に乗って通学し、パソコンを開いて課題のレポートを書くといった、そうした日常にも高度な技術は潜んでいるのだが、この明らかに[C]な生活環境を、私たちは日常的に不自然なものと感じてはいない。大雪で電車が止まってしまうようなときに初めてその便利さに気づくというくらいに、技術は日常の一部となっている。このとき私たちは、技術的な世界でこそ本来の生活をまっとうしているのだと考え、このあたりまえの世界を成り立たせている条件について考えようとしていない。

他方で、人や社会は技術によって条件づけられているのだと強調しすぎることにも問題がある。たとえば、[l]遺伝子操作によって新しい生命を誕生させることは、現代の技術水準ですでに実現可能である。それにもかかわらず、人の体細胞からクローンを誕生させようという実験が固く禁止されているのはなぜだろうか。人や社会は、無際限に技術によって変えられているわけではないのだ。このとき私たちは、「人の本性」を、技術とは別の位相で考えていることになる。

技術によって人の生活が成り立っており、同時に、人の生活のなかからその必要に応じて技術が作り出されている。この相互的因果を考えることは、人と世界のかかわりを考えることにほかならない。

（『文化人類学の思考法』所収　山崎吾郎（やまざきごろう）「技術と環境」による）

（注）1　ハイブリッド……異なるものを組み合わせて作られたもの。
2　ベンジャミン・フランクリン……アメリカの政治家、著述家、科学者（一七〇六～一七九〇）。アメリカ独立宣言起草委員の一人。
3　アンリ・ベルクソン……フランスの哲学者（一八五九～一九四一）。
4　マルセル・モース……フランスの人類学者（一八七二～一九五〇）。

問一　傍線部a「私たちは昔からすでにサイボーグだったのだろうか」とあるが、筆者がそのように述べるのはなぜか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は [1]。

1　人間は昔から、身体能力を補い増強するための道具を開発する能力を身につけていたから。
2　最先端の技術ではなくても、人間の身体能力を補強する道具は昔から存在していたから。
3　人間が昔から使ってきた道具は最先端とまでは言わなくても、日常生活を支える立派な技術だから。
4　人間は昔から、最先端の技術に頼らなくても、身近な道具によって生活を改善してきたから。

問二　空欄 [A]・[B] に入る語句はなにか。次の1～8のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。ただし、同じ選択肢を二回選ぶことはできない。解答番号は [2]・[3]。

1　たしかに　　2　さらに　　3　または　　4　つまり
5　むしろ　　6　では　　7　そこで　　8　だから

問三　傍線部b「「世界そのもの」のように感じられている」とあるが、ここでの「世界」とはどのようなものか。次の1～4のうちから適当でないものを一つ選びマークしなさい。解答番号は [4]。

1　本来の姿をした世界。
2　眼鏡をかけずに見る世界。
3　自分が思うままに支配できる世界。
4　技術によってゆがめられていない世界。

問四　傍線部c「このとき、自然と不自然、本物と偽物のあいだには、ちょうど、眼鏡とサイボーグのあいだにあるのと同じ差異が感じとられている」とあるが、筆者はどのような点からそう述べるのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 5 。

1　害虫を寄せ付けないよう植物の種の遺伝子を改変することが、植物以外の生物にも影響を及ぼすことになる点。
2　害虫を寄せ付けないよう植物の種の遺伝子を改変することが、害虫の本能的な行動を操作することになる点。
3　薬を飲んで記憶力を高めることが、その人自身にもともと備わった能力に手を加えることになる点。
4　薬を飲んで記憶力を高めることが、本来は個人の力で向上させるべき能力を操作することになる点。

問五　傍線部d・e・h・j・kと同じ漢字を含むものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 6 ～ 10 。

d「イゼン」
1　敵を四方からホウイする。
2　イサイを尋ねる。
3　サハラ砂漠イナンの地域。
4　理論にイキョした結論を出す。

e「シャクゼン」
1　評価のシャクドを決める。
2　軽くエシャクする。
3　みなさま、お手をハイシャク。
4　ハクシャクの称号をもつ人物。

h「ソウホウコウ」
1　チソウが堆積する。
2　歴代の内閣ソウリ大臣。
3　必死のギョウソウ。
4　ソウヘキをなす。

j「レンサ」
1　経歴サショウが発覚する。
2　車をサテイする。
3　入り口をフウサする。
4　タイサで勝つ。

k「ボウトウ」
1　有名なボウケン小説。
2　ネボウして遅刻する。
3　ムボウな計画を立てる。
4　将来へのテンボウが開ける。

問六　傍線部f「人間的な知性の定義の中心に道具の製作を位置づけた」とあるが、それはなぜか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 11 。

1　人間は想像力をはたらかせることができ、使用者の心的機能を考慮したうえで道具を製作したり使用したりできるから。
2　心を想定することは人間独特の道具とのかかわり方であり、道具を用いることは人間の本質を表す行為だから。
3　道具の製作をするためにさらなる道具を作り出すことは、高度な知能が必要で他の動物には真似（まね）できない行為だから。
4　人間と道具とのかかわりには心的機能が影響するため、技術を通じて新たな世界をつくりだすことができるから。

問七 傍線部g「技術の特性」とあるが、モースは「技術の特性」をどのように考えていたか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 12 。

1 身体動作の遂行のために技術が必要とされると同時に、技術が人間社会を大きく発展させる。
2 身体動作を補完するために技術が利用されるだけでなく、技術が人間の身体能力を引き上げる。
3 身体動作の延長として技術が生み出される一方で、技術が人間の生活の有り様を形成する。
4 身体動作が技術と区別されたものとして存在する一方で、技術が人間の身体と一体にもなりうる。

問八 傍線部i「人と技術」とあるが、筆者は人と技術の関係をどのようにとらえているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 13 。

1 人は技術を発展させ続ける存在であり、変化する社会の需要に応じて道具を単純なものから複雑で高度なものへと進化させている。
2 人と技術は切り離せないものであり、人が生活のなかから技術を生み出し、その技術の影響を受けて生活が変化するということを繰り返す。
3 人は本来的に優れた知性を備えているが、技術を作り出し利用することで、その知性を社会で共有し最大限発揮することができる。
4 人は技術を便利な道具として利用するだけでなく、新しい技術を生み出すことによってその知性を磨き社会を便利なものに作り変えている。

問九 空欄 C に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 14 。

1 作為的
2 人工的
3 先進的
4 人間的

問一〇　傍線部1「遺伝子操作によって新しい生命を誕生させること」とあるが、筆者がこのような例を挙げたのはなぜか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 15 。

1　倫理的な観点から技術の活用が押しとどめられる事例を挙げることによって、人や社会には技術がいくら発展しようとも立ち入ることができない領域が存在していることを示すため。

2　倫理に反するという理由から懸念されている技術を例に挙げることによって、技術を絶対視することで人や社会がそうした技術を容認する方向に進みかねないことを示すため。

3　現代の技術のうちで倫理的に許容されていないものを例に挙げることによって、最先端の技術の一部には人や社会の要求に沿わないものも含まれていることを示すため。

4　実用化に向けての倫理的判断が求められる技術を例に挙げることによって、現代の技術が「人の本性」に影響を与えるほどの高度なレベルにまで達していることを示すため。

問題二

両親を亡くした大学生の「僕」は、水墨画の巨匠である湖山先生の弟子になった。以下は、「僕」が湖山先生のもとで水墨画の練習を始める場面である。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「さあどうぞ」

と、湖山先生は墨をするように促した。僕は恐る恐る墨を持って、硯の上でゴシゴシとすり始めた。おもしろいくらいに墨はすれて、透明な水は真っ黒になっていった。

しばらくすっていると粘りが出てきて、あとどれくらいすればいいのだろう、と視線を上げると湖山先生は居眠りをしていた。

確かに退屈だろうけれど、居眠りしなくても、とも思ったが、とりあえず湖山先生を起こすと、

「もうできたかね？」

と、私はまるで居眠りなんかしてなかったぞというような顔で、起き上がった。それから、僕の座っている席のほうへやってきた。僕は[a]背筋がぐっと伸びた。

着ている作務衣から漂う清潔そうなにおいは何なのだろう、と思っていると、湖山先生は[b]無造作に筆を取って、目の前の紙に何かをバシャバシャと描き始めた。

この前と同じ、[c]湖畔の風景が出来上がり、次に紙を置くと渓谷が出来上がり、最後には、竹が出来上がった。どれもまさしく神業で、一瞬の出来事だった。どうしてこんな速度で、こんなに高齢な老人が筆を操れるのだろう？　年齢を感じさせない若々しい動きだった。そして何より速い。動きの細部についてはあまりに速すぎて分からない。手に持った筆が、先日と同じく、硯と梅皿(注1)と布巾と筆洗の間を回転しているということしか分からなかった。

気づくと墨はなくなり、硯の中身は空っぽになっていた。描かれた絵は床に広がっていた。そして湖山先生は衝撃的な一言を、僕に告げた。

「もう一回。もう一回、墨をすって」

僕は唖然としながらも、また一から墨をすり、湖山先生はうたた寝を始めた。

何が起こったのだろう？　何か、気に障ることをしてしまったのだろうか？

いろいろと思案しながら、惑いつつ墨をゴシゴシすり、これでいいだろうというところでまた湖山先生を起こした。

特別に機嫌が悪そうでもなく、かといって良さそうでもなく、また筆を取ると［A］にバサバサと描き上げて、硯の中身を空っ

ぽにした。それからまた、さっきと同じせりふがかえってきた。

「もう一回」

僕は眉をひそめて、いったい何が起こっているのだろう？　と墨をすりながら考え続けた。

僕はとにかく墨をすり、湖山先生を呼んだ。湖山先生は居眠りから目覚めて、描いて、僕はまた同じ言葉をもらい、また墨をすり……と、そんなことを何度か繰り返した。もういい加減疲れてきたので、いろいろ考えるのをやめて、ただなんとなく手を動かし、有り体に言えば適当に墨をすって湖山先生を呼んだ。すると湖山先生は最初のときとまったく同じく、特に不機嫌でもなく不愉快でもなさそうな顔で、筆を取ると、

「筆洗の水を換えてきて」

と、言った。僕は言われたとおり廊下に出てすぐの場所にある流し場で、筆洗の水を新しいものに換えた。湖山先生の前に真新しい水を置いて席に着くと、湖山先生は待ち構えていたように筆を取って、墨を付けて筆洗に浸した。その瞬間、湖山先生は口を開いた。

「これでいい。描き始めよう」

僕は湖山先生が何を言っているのか、分からなかった。どうしてまじめにすった墨が悪くて、適当にすった墨がいいんだ？

僕はなんとも腑(d)に落ちないという表情をしていたのだろう。湖山先生はにこやかに笑って答えた。

「粒子だよ。墨の粒子が違うんだ。君の心や気分が墨に反映しているんだ。見ていなさい」

湖山先生は、筆をもう一度取り上げて、いちばん最初に描いた風景とまったく同じものを描いた。木立が前面にあり、背後に湖面が広がり、さらにその背後に山が広がっているという絵で、レイアウトはまったく同じだ。

だが湖山先生が筆を置いた瞬間の墨の広がりや、きらめきが何もかも違った。

画素数の低い絵と高い絵の違いと言ったらいいのだろうか。実際に粒子が違うというのなら、そういうことなのだろう。小さなきらめきや広がりが積み重なり、一枚の風景が出来上がったとき、最初に見たときは漠然と美しいとしか感じられなかった絵が、二枚目になると懐かしさや静けさやその場所の温度や季節までも感じさせるような気がした。細かい粒子によって出来上がった湖面の反射は、夏の光を思わせた。薄墨で描かれた線のかすれが、ごく繊細な場所まで見て取れるので、眩(まぶ)しさや、色合いまでも思わせ、波打つ様子は静けさまでも感じさせた。その決定的な一線は、たった一筆によって引かれたものだった。同じ人物が同じ道具で、同じように絵を描いても、墨のすり方一つでこれほどまでに違うものなのかと、僕は愕(がくぜん)然とした。とたんに僕は恥ずかしくなった。

僕はとんでもない失敗(e)をさっきまで繰り返していたのだ。湖山先生は相変わらず、にこやかに笑っている。

私が何も言わなかったのが悪いが、と前置きした後に湖山先生は言った。
「青山君、力を抜きなさい」
静かな口調だった。
「力を入れるのは誰にだってできる、それこそ初めて筆を持った初心者にだってできる。それはどういうことかというと、凄(すご)くまじめだということだ。本当は力を抜くことこそ技術なんだ」
力を抜くことが技術？　そんな言葉は聞いたことがなかった。僕は分からなくなって、
「まじめというのは、よくないことですか？」
と訊(たず)ねた。湖山先生はおもしろい冗談を聞いたときのように笑った。
「いや、まじめというのはね、悪くないけれど、少なくとも自然じゃない」
「自然じゃない」
「そう。自然じゃない。我々はいやしくも[f]水墨をこれから描こうとするものだ。水墨は、墨の濃淡、潤渇、肥瘦、階調(注2)でもって森羅万象を描き出そうとする試みのことだ。その我々が自然というものを理解しようとしなくて、どうやって絵を描けるだろう？　心はまず指先に表れるんだよ」
[g]僕は自分の指先を見た。心が指先に表れるなんて考えたこともなかった。それが墨に伝わって粒子が変化したというのだろうか。だが、たしかにその心の変化を墨のすり方だけで見せつけられた身としては、うなずくしかない。
「[h]君はとてもまじめな青年なのだろう。君は気づいていないかもしれないが、真っすぐな人間でもある。困難なことに立ち向かい、それを解決しようと努力を重ねる人間だろう。その分、自分自身の過ちにもたくさん傷つくのだろう。私はそんな気がするよ。そしていつの間にか、自分独りで何かを行おうとして心を深く閉ざしている。その強張(こわば)りや硬さが、所作に現れている。そうなるとその真っすぐさは、君らしくなくなる。真っすぐさや強さが、それ以外を受け付けなくなってしまう。でもね、いいかい、青山君。水墨画は孤独な絵画ではない。水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ」
僕は視線を上げた。
言葉の意味を理解するには、湖山先生の声があまりにも優しすぎて、何を言ったのか、うまく聞き取れなかった。不思議そうな顔で、僕は湖山先生を見ていたのだろう。湖山先生は言葉を繰り返した。
「いいかい。水墨を描くということは、独りであるということとは無縁の場所にいるということなんだ。水墨を描くということは、自

然との繋がりを見つめ、学び、その中に分かちがたく結びついている自分を感じていくことだ。その繋がりが与えてくれるものを感じることだ。その繋がりといっしょになって絵を描くことだ」

「繋がりといっしょに描く」

僕は言葉を繰り返した。僕にはその繋がりを隔てているガラスの部屋の壁が見えていた。[i]その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた。

その向こう側にいま、湖山先生が立っていた。

「そのためには、まず、心を自然にしないと」

そう言って、また湖山先生は微笑んだ。湖山先生が優しく筆を置く音が、耳に残った。その日の講義は、ただそれだけで終わった。

何か、とても重要なことを惜しみなく与えられているようで、そのすぐ前を簡単に通り過ぎてしまいそうになっている自分を感じていた。

小さな部屋に満たされた墨の香りと、湖山先生の穏やかな印象が、カチコチに固まっていた水墨画のイメージをボロボロと打ち壊していくのが分かった。

父と母が亡くなって以来、誰かとこんなふうに長い時間、穏やかな気持ちで向き合ったことがなかったのだと僕は気づいた。

（砥上裕將『線は、僕を描く』による）

（注）1　梅皿……絵具などを溶くために用いる梅のような形をした皿。

2　階調……明るいところから暗いところまでの段階。

問一　傍線部a「背筋がぐっと伸びた」とあるが、このときの「僕」の様子として正しいものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 16 。

1　起き上がった湖山先生が居眠りをしていなかったふうを装っているので、自分もそれに合わせて素知らぬふりをしている。

2　具体的な指示がないままに作業を進めるなかで、湖山先生からようやく墨のすり具合を確認されることになり、緊張している。

3　湖山先生がやっと目を覚ましたようなので、一人で墨をすっている間に緩んでしまった気持ちを切り替えようとしている。

4　自分のすった墨を使って湖山先生が絵を描こうとしていることを察して、少しでも技術を吸収しようと意識を集中している。

問二 傍線部b・d・fの語句の本文中の意味はどれか。次の1～4のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 17 ～ 19 。

b「無造作に」

1 丁寧に
2 勢いよく
3 唐突に
4 何気なく

d「腑に落ちない」

1 気にならない
2 思いもよらない
3 納得できない
4 受け止めきれない

f「いやしくも」

1 かりにも
2 結局のところは
3 偶然にも
4 率直に言えば

問三 傍線部c「湖畔の風景が出来上がり、次に紙を置くと渓谷が出来上がり、最後には、竹が出来上がった」とあるが、この表現からどのような様子が読み取れるか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 20 。

1 湖山先生が無駄のない動きで筆を運ぶなかで、じわじわと壮大な絵が出来上がっていく様子。
2 「僕」が湖山先生の筆さばきを追えないままに、次々と絵が出来上がっていく様子。
3 湖山先生が矢継ぎ早に絵を描き上げていくために、「僕」の目には簡単な動作に映っている様子。
4 湖山先生が、「僕」が足元にも及ばないほどの高度な技術を用いて絵を描き上げていく様子。

問四 空欄 A には、「一息に作り上げること」という意味の四字熟語が入る。空欄 A に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 21 。

1 画竜点睛（がりょうてんせい）
2 巧遅拙速（こうちせっそく）
3 精神一到（せいしんいっとう）
4 一気呵成（いっきかせい）

問五 傍線部e「とんでもない失敗」とあるが、「僕」はどのようなことを「失敗」だと考えているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 22 。

1 質の高い絵がかけるかどうかは墨のすり方にかかっているということを知らずに、正しくないすり方をしていたこと。
2 繰り返し同じ行為をさせることで、湖山先生が墨をする工程の重要さを示唆していたことに気づかなかったこと。
3 かしこまって墨をするばかりで、よい絵を描くには適度に力を抜いて墨をする必要があることを理解していなかったこと。
4 湖山先生から何度も墨をすらされることに嫌気がさして、最後にはいい加減な気持ちで墨をすってしまったこと。

問六 傍線部g「僕は自分の指先を見た」とあるが、このとき「僕」はどのようなことを考えているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 23 。

1 墨のすり方によって粒子の質を操れるとはにわかには信じがたいが、湖山先生が描いた絵を比較してみると、たしかにその線の表れ方に顕著な違いが見受けられたので、湖山先生の言う通りなのだろう。
2 自然を理解しているかどうかが指先から伝わってしまうということは今まで考えもしなかったが、自分の自然に対する理解度が湖山先生に及ばないのはたしかなので、それが墨をするときに表れたのかもしれない。
3 自分の心持ちが墨のすり方に影響するということはこれまで意識したことがなかったが、自分が墨をするときの心境の変化が湖山先生の描く絵に違いをもたらしたことは間違いないので、納得せざるをえない。
4 心の動きが指先に表れるということは考えも及ばなかったが、思い返してみると、気が張っていたときと気が抜けたときとでは墨をする指への力の入り具合が違ったので、湖山先生の言うことには一理あるのだろう。

問七 傍線部h「君はとてもまじめな青年なのだろう」とあるが、湖山先生は「僕」のまじめさをどのように捉えているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24 。

1 行き詰まったときにも自分のやり方に固執し、別の方法を試そうとしない。
2 物事に取り組むときに自分だけでやり遂げようとして周囲の力を頼ろうとしない。
3 何事も完璧にやり遂げようとするため、自分の未熟さを受け入れられない。
4 自分の考えが正しいと思い込み、他者からの助言を聞き入れようとしない。

問八 傍線部i「その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25 。

1 「僕」はずっと、湖山先生の話すような自然と繋がった先に見える世界を思い描こうとしていたということ。
2 「僕」はずっと、自然からなにかを学ぶことを怠っていたにもかかわらず、自然の風景に心をひかれていたということ。
3 このときまで「僕」は、水墨を描くとはどういうことかがわからないなりに上達しようと必死に努力していたということ。
4 このときまで「僕」は、周囲に心を開かず、自分独りの世界に閉じこもったまま水墨を描こうとしていたということ。

問九 湖山先生の「僕」への指導の仕方はどのようなものか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 26 。

1 両親を失った「僕」の保護者のような目線で「僕」の悩みに寄り添い、「僕」の性格を受け入れながら正しい方向へ導こうとしている。
2 水墨に求められる姿勢を言葉で伝えるのではなく、自身が模範となる動きを示すことによって「僕」に気づかせようとしている。
3 水墨に必要な心構えを前もって教えるのではなく、実践のなかで学ばせることによって「僕」と根気よく向き合おうとしている。
4 自身がつちかってきた水墨の知識や技術を惜しみなく披露し、「僕」がその真意を理解するまで言葉を尽くして伝えようとしている。

問題三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

他者の心はどのようにして理解されるのだろうか。自分の心は内観によって直接知られる。たとえば、自分の歯の痛みは、自分の表情や振る舞いを観察しなくても、直ちにわかる。しかし、他人の歯の痛みは、他人の表情や振る舞いを通じてのみ知られる。では、他人の表情や振る舞いから、いったいどのようにして他人の痛みが知られるのだろうか。これが[a]他者理解の中心問題であり、いくつかの競合する説が唱えられている。以下では、それらの説をみながら、他者理解の本質に[b]セマっていこう。

自分の心であれ、他者の心であれ、私たちは心について一般的な知識をもっている。たとえば、ラーメンを食べたいと思い、駅前にラーメン屋があると思えば、駅前へ行くだろうとか、ある人に怒りを覚えれば、その人を非難するだろうといったことを知っている。このような一般的な知識の集まりは、心についての科学的な探究によって得られた理論的な知識ではないが、日常的な経験の積み重ねによって得られたそれなりに理論的な知識だといえよう。したがって、それは「科学的心理学」と対比して素朴心理学（folk psychology）と呼ばれる。

[c]他者理解に関する理論説（theory theory）によれば、私たちは素朴心理学の知識に基づいて、他者の心を理解する。ある人が向こうからやってくるタクシーに向かって手を挙げたとしよう。私たちはこの振る舞いから、その人はタクシーを呼び止めたいのだということを知る。理論説によれば、ここでは、次のような一般的知識が関係している。すなわち、タクシーを呼び止めたいと思い、手を挙げれば、タクシーを呼び止めることができると思えば、手を挙げるだろうという知識である。私たちはこのような一般的知識に基づいて、その人が手を挙げたことから、その人がタクシーを呼び止めたいということを推理するのである。

他者の心についてのこのような理論的理解は、物理的事物についての理論的理解と何ら変わらない。物理学者たちは電子の基本的な性質からさまざまな電気現象を説明する一般的な知識の集まり、［　A　］電気理論をもっている。彼らはこのような電気理論に基づいて、たとえば、こすった棒に髪の毛が吸い寄せられるとき、棒と髪の毛の中の電子がどう移動したかを推理し、それによってそのときの電子の配置を知る。物理学者が物理理論に基づいて物理的現象の背後にある理論的な対象のあり方を知るように、私たちは素朴心理学に基づいて他者の行動の背後にある他者の心の状態を知るのである。

理論説は他者の心の理解を物理的事物の理論的理解と基本的に同じとみることによって、直接観察されない他者の心を知ることがど

うして可能かという他者理解の根本的な謎を解こうとする。しかし、私たちが素朴心理学の知識をクシ[d]して他者の心の状態をあれこれ推理して知ることがたしかにあるとしても、私たちは他者の心を知るのに、ふつうはそのような理論的推論を行っていないのではなかろうか。私たちはむしろ、ふつう他者の心を自分の心でシミュレートすることによって、他者の心を知る。そうシミュレーション説は主張する。

この説の基本的な考え方はこうだ。私たちの心は互いによく似ている。誰でも、空腹になれば、何かを食べたくなるし、何かを食べたいと思えば、食べ物を探して食べる。そうだとすれば、他者の心を理解するのに、自分の心を利用することができる。他者が置かれた状況に自分を置いて、自分がそのときどんな心の状態になるかを試してみれば、他者の心を知ることができる。たとえば、友人に裏切られた人がどんな気持ちでいるかは、自分が友人に裏切られたとして、そのとき自分がどんな気持ちになるかを試してみればよい。このようにして他者の心をそれとよく似た自分の心でシミュレートすることで、他者の心を知ることができるのである。

[e]シミュレーションによる他者理解は、シミュレーションによる物理的事物の理解と基本的に同じである。ある橋を重いトラックが渡れるかどうかを知るために、理論的に計算することも可能だが、橋とトラックの模型を作って、模型のトラックが模型の橋を渡れるかどうかを試してみることもできる。他者の心を自分の心でシミュレートして理解することは、そのようなシミュレーションによる物理的事物の理解と本質的に変わらないのである。

私たちはたしかにシミュレーションによって他者の心を理解することがある。しかし、ふつう他者の心を理解するとき、いちいち他者の状況に自分を置いて、自分の心がどうなるかを試してみるというようなことをするだろうか。私たちがふつう理論的推論を行わないように、シミュレーションも行わないのではないだろうか。そんな迂遠（うえん）なことをしなくても、他者の心はふつうもっと直接的にわかるように思われる。

直接知覚説によれば、他者の心は他者の表情や振る舞いのうちにじかに知覚される。泣いている人を見れば、そこに悲しみが知覚され、足をフ[f]まれて顔を歪（ゆが）めている人を見れば、そこに足の痛みが知覚される。私たちはふつう他者の心を理解するとき、表情や振る舞いから理論的推論やシミュレーションのような煩瑣（はんさ）な手続きを経て理解するのではなく、表情や振る舞いのうちに他者の心を直接知覚するのである。

二人称的な他者理解がこの直接知覚説に大きな支持を与える。あなたが泣いているのを見れば、私は「どうしたの」と問いかけたり、慰めたりする。あなたに対する私のこの二人称的な応答[g]のうちに、私があなたの悲しみを理解していることが示されている。この理解

は理論的推論やシミュレーションを介して得られたわけではない。私はあなたの泣き顔に直接あなたの悲しみを知覚したのである。

直接知覚説は私たちの通常の他者理解のあり方をよく捉えている。私たちはたしかに、ふつう他者を理解するとき、理論的推論やシミュレーションを行ったりはしない。［　B　］、他者の心は本当に文字通り知覚されるのであろうか。理論的推論やシミュレーションなしに他者の心がわかるとしても、それが知覚されるということには必ずしもならない。ケーキの箱を見れば、その中にケーキがあることがすぐわかるかもしれないが、だからといって中のケーキが見えるわけではない。他者の心が知覚されるためには、表情や振る舞いのうちにまさに他者の心が出現していなければならない。

泣き顔が悲しみの一部であれば、泣き顔に悲しみが部分的に現れている。したがって、泣き顔を見れば、悲しみが見える。それは、犬小屋から犬の尻尾がはみ出ているのが見えれば、犬が見えると言ってよいのと同様である。しかし、泣き顔は悲しみの一部だろうか。そうかもしれない。情動はその一部として表情を含むかもしれない。しかし、たとえば、水を飲むという振る舞いは水を飲みたいという欲求の一部だろうか。そうではなく、その振る舞いの背後にあって、その振る舞いを引き起こすものではないだろうか。心的状態の中には、［　C　］のように、身体性を帯びていると考えられそうなものもあるが、［　D　］のように、そうではないと思われるものもある。身体性を帯びない心的状態については、表情や振る舞いから直接それが理解されるとしても、それが知覚されると言うことはできないだろう。

他者の心が自分の心のように内観できない以上、他者の心を知るためには、他者の表情や振る舞いを手がかりにするしかないことは、明白であるように思われる。しかし、じつはそうではない。ｆＭＲＩ(注)のような脳画像装置を用いて脳の活動を知ることができるようになれば、表情や振る舞いを観察しなくても、脳活動を観察することによって他者の心を知ることができるだろう。

実際、脳科学では、脳の活動から心の状態を読み取る研究が盛んになされている。たとえば、嘘(うそ)をついているときの脳活動をｆＭＲＩで調べて、嘘をついているときにトクチョウ[h]的な脳活動を探り出す試みがなされている。それがセイコウ[i]すれば、ある人が嘘をついているかどうかをその人の脳活動から知ることができるようになろう。このようなマインドリーディングが可能になれば、他者の心は他者の表情や振る舞いを観察しなくても、他者の脳活動を計測すれば、理解できるようになるだろう。

ところで、脳から心を読み取ろうとするとき、心と脳はどんな関係にあると想定されているのだろうか。これには、いろいろな可能性[j]がある。心と脳は別だとする心身二元論的な見方をとっても、心的状態と脳活動の間に相関関係があると考えれば、その相関関係に基づいて、脳活動から心的状態が知られることになる。また、心は脳に他ならないという物理主義的な見方（心脳同一説や機能主義な

ど）をとれば、心的状態は脳活動に他ならないから、脳活動を観察することは心的状態を観察することに他ならないことになる。私たちは他者の心的状態を内観できなくても、それを直接観察することができるのである。

（信原幸弘（のぶはらゆきひろ）『心の哲学　新時代の心の科学をめぐる哲学の問い』による）

（注）ｆＭＲＩ……ＭＲＩを用いて脳の活動を調べる方法。

問一　傍線部ａ「他者理解の中心問題」とあるが、それはどのようなことか。次の１～４のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 27 。

１　他者の表情や振る舞いを手がかりに、どのようにして他者の痛みを知ることができるのかということ。
２　他者の痛みを知る手段として、他者の表情や振る舞いが用いられるようになったのはなぜかということ。
３　他者の表情や振る舞いを観察するだけで、本当に他者の痛みを知ることができるのかということ。
４　他者の表情や振る舞いと他者の痛みとの間に、つながりを見いだすことができるのかということ。

問二　傍線部ｂ・ｄ・ｆ・ｈ・ｉと同じ漢字を含むものはどれか。次の１～４のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 28 ～ 32 。

ｂ「セマって」
１　ハクガイを受ける。
２　ハクシャを掛ける。
３　権利をハクダツする。
４　旅館にシュクハクする。

d「クシ」

1　クニクの策を講じる。

2　先祖をクヨウする。

3　西洋医学のセンク者。

4　開業資金をクメンする。

f「フまれて」

1　山頂にトウタツする。

2　メンドウをみる。

3　人跡ミトウの地。

4　トトウを組む。

h「トクチョウ」

1　新しいことにチョウセンする。

2　お金をチョウシュウする。

3　世間のフウチョウ。

4　時代をチョウエツする。

i「セイコウ」

1　次の段階にイコウする。

2　ジコウの挨拶。

3　コウエイ住宅に住む。

4　ネンコウ序列の制度。

問三 傍線部c「他者理解に関する理論説」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 33 。

1 科学の分野では問題として取り上げられないような日常の何気ない振る舞いに注目して他者の心を推測すること。
2 自分が過去に出会った複数の経験から順当に導き出すことのできる結論をもとにして他者の心を推測すること。
3 他者がもっている欲望を想像し、それと一致するような振る舞いを見つけ出してその行動を分析すること。
4 他者は社会一般で当たり前とされている振る舞いをするものだという前提のもとにその行動を分析すること。

問四 空欄 A ・ B に入る語句はなにか。次の1～8のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。ただし、同じ選択肢を二回選ぶことはできない。解答番号は 34 ・ 35 。

1 あるいは　2 または　3 だから　4 まず
5 むしろ　6 しかし　7 なぜなら　8 すなわち

問五 傍線部e「シミュレーションによる他者理解は、シミュレーションによる物理的事物の理解と基本的に同じである」とあるが、どのような点で同じなのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 36 。

1 身近にあるものを用いることである状況を再現しようとしている点。
2 別の場にまったく同じ条件を整えることで検証を試みようとしている点。
3 想像力によって自分の外にあるものを理解しようとしている点。
4 代わりになるものを模擬的に用いてある状況を推測しようとしている点。

問六 傍線部g「この二人称的な応答」とあるが、筆者はどういった点に着目しているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 37 。

1 相手が泣いている姿を見て、言葉をかける必要があると理解している点。
2 相手が泣いている姿を見て、なぜ泣いているのか推測しようとしている点。
3 相手が泣いている姿を見ただけで、相手を気遣う振る舞いをしている点。
4 相手が泣いている姿を見ただけで、何事かがあったことを察している点。

問七 空欄 C ・ D に入る語句の組み合わせとして正しいものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38 。

1 C 情動　D 欲求や信念
2 C 欲求　D 情動や信念
3 C 情動や信念　D 欲求
4 C 情動や欲求　D 信念

問八 傍線部j「いろいろな可能性」とあるが、これについて筆者はどのように考えているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 39 。

1 脳と心が別だとすれば、両者に相関関係が見られない限りは脳活動から心的状態を読み取ることはできないことになるため、脳と心が同じだと考えるほうが都合がよい。
2 脳と心が別だと考えた場合は心的状態を読み取るために両者の関係を分析する工程を挟むことになるが、脳と心が同じだと考えた場合は脳活動を観察するだけでよいので効率的である。
3 脳と心が別だと考えた場合は両者の相関関係を分析する必要があるが、脳と心が同じだと考えた場合は脳活動が心的状態を表していることになるため、その読み取りはより正確であると言える。
4 脳と心が別だと考えようが、脳と心が同じだと考えようが、脳活動を観察するだけで心的状態を読み取ることが可能だと結論づけられることに変わりはない。

問九　この文章の論の進め方の説明として正しいものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 40 。

1　他者理解にまつわる疑問を解明するために複数の仮説を取り上げつつ、それぞれの説に備わる欠点を指摘し、筆者独自の主張につなげている。

2　他者理解について問題提起をし、それをひも解く通説を取り上げては否定するといった展開を繰り返しながら多種多様な説を紹介している。

3　他者理解の本質を探るために様々な通説を取り上げ、それぞれの説が生まれた背景を具体例を交えて説明することで説得力を高めている。

4　他者理解について考察を深めるために身近な例を挙げながら様々な学説を紹介し、初めに提起した問題に対する唯一の答えを導いている。